



TITLE:

今後の植民政策の基準

AUTHOR(S):

山本, 美越乃

CITATION:

山本, 美越乃. 今後の植民政策の基準. 経済論叢 1923, 16(1): 162-173

ISSUE DATE:

1923-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127980>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 一 號 第 十 六 卷

大正二十一年一月一日發行

新餘剩價值説及社會階級協和論

法學博士 田島 錦治

租稅配分に於ける公益逆比の原則

法學博士 神戸 正雄

個人と團體との關係

法學博士 財部 靜治

サン・シ
モンの社會改造哲學と社會連帶思想

文學博士 米田庄太郎

マルクスの階級概念

文學博士 高田 保馬

物價調節對米價調節問題

法學博士 戸田 海市

資本論中或る一句の各種版本に於ける異同について

法學博士 河上 肇

今後の植民政策の基準

法學博士 山本美越乃

農業勞働自治組合制

法學博士 河田 嗣郎

營業稅改正論

法學博士 小川郷太郎

物價問題の統計的研究

法學士 汐見 三郎

今後の植民政策の基準

山本美越 乃

一九一四年の世界的の一大慘劇以前に於ける歐洲列強の國際關係は、武裝的平和の維持なる一語を以て之を代表することを得べく、前世紀の末年即ち一八九八年に露國皇帝ニコラス二世が、世界平和の一大理想を目標として列國會議の開催を提議し、其の結果一八九九年及一九〇七年の兩回に亘りて國際平和會議を和蘭の海牙に開くに至りたりと雖も、各國相對峙して互に國力の競争を試むる以上は、戦争の絶滅を期するが如きことは到底望み得べからざることとして、軍備の制限若くは撤廢の如きは最初より殆ど問題とならず、第一回には二十六箇國、第二回には四十四箇國の代表者一堂に會して協議する所ありしも、意見の一致を見たるは僅に國際紛争の仲裁機關に關する事項と、將來起り得べき戦争の慘禍を成るべく小ならしめんが爲めに、戦時國際法規に人道上の要求を加へんとするが如き寧ろ枝葉の問題に屬し、武裝的平和の維持が啻に不生産的の國費の負擔を増加せしむるのみならず、國民の智力及精力も之が爲めに無益に消耗せらるゝに至る不幸より、各國民を免れしめんとする目的を以て提議せられたる國際平和會議も、此の如くして終に其の目的を達すること能はずして止み、次で今世紀に入りてよりは世界の平和を促進せし

むる運動よりは、寧ろ之を阻止せんとする事實の頻々として續出するに至れるより（例へば日露戦争、伊土戦争、バルカン戦争等の如き）、平和主義の理想は全く空想視せられ、従て軍備の如きも之が制限はおろか、從來よりも一層急激なる速度を以て増加せらるゝに至れり。

軍備の制限に依る武裝的平和の解除が國際平和會議の考慮する所とならざりし所以は、一方に於ては世界の平和を夢想しつゝ、他方に於ては國家的發展の希望を容易に棄つることを欲せざる矛盾したる二箇の思想の列強諸國を支配しつゝありしに因るものにして、殊に斯かる思想の最も鞏固なりしは英獨の二國なりとす。

由來英獨兩國の國際關係はビスマルクの政權を掌握しつゝありし時代には、一は自由政治を謳歌し他は獨裁政治を擁護したるに拘らず、比較的友邦の好しみを維持することを得、殊にビスマルクは英國の感情を害せざらんことに苦心したる結果、夙に他國と共に植民的の活動に従事すべかりしに拘らず、英國に對する關係を顧慮して容易に之に手を下すことを爲さざりしが如きは、如何に兩國の國交上に細心の注意を怠らざりしかを證する一例として之を擧ぐることを得べし、然るにウヰルヘルム二世の即位と共に獨逸の對外政策は茲に一大變化を來し、今や敏速に發展しつゝある國內産業の爲めにも、又急激に増加しつゝある人口問題の解決の爲めにも、植民的活動の最も急務たるべきを感ずるに至りたりと雖も、如何せん獨逸が此の最後の活動に着手するに至

れる時は、所謂『日受け良き植民地』（“Place in the sun”）は既に他國の分有に歸し、唯僅に亞弗利加及南洋の一隅に貧弱なる根據地を領有し得たるに過ぎず、然れども一と度其の前進を決定したる獨逸は、之を以て満足する能はざるや明かにして、更に前進的の活動を繼續せんと欲せば其の執るべき途は唯一あるのみ、即ち現に世界に於ける二大植民國として、嘗て西班牙及葡萄牙の植民史上に有したる地位を、代つて占むるに至れる英佛の兩國を對手として前進するの他なきこと是れ也。

此の如くして獨逸國民の植民的活動に對する熱烈なる態度は、遂に英獨間の多年の親交に龜裂を生ぜしめ、殊に一八九六年南亞共和國大統領クルーゲルが、デームソン侵入軍を撃退したることに對して獨逸皇帝の大統領に寄せたる祝電は、其の最初の感情の爆發とも稱するを得べく、英國は之を以て獨逸が英國に對して敵意を挾める證左となし、又獨逸はボア戰爭の如きは英國が武力を恃みて小弱國を威壓する不正の行爲として之を非難したるより、爾來英獨兩國の國際關係は拭ふ可からざる一種の暗雲を以て閉さるゝに至れり、然れども兩國の關係を更に一層危險に導きたるものは、實に一九〇〇年の有名なる獨逸の海軍法にして、英國は之を以て恰も自國に對する挑戰狀の如くに看做し、之に對抗せんが爲めに英國の海軍力は今世紀に入りて著き進歩を見たるも、如何せん鋭意海軍競争に全力を傾注したる結果は、互に莫大なる不生産的の費用を嵩加せ

しむるに至れるより、英國政府は屢々『海軍休日』(Naval holiday)を提言したるも、強大なる陸軍力に加ふるに優勢なる海軍力を以てせば、海外各地に於て先進植民國の勢力を驅逐すること敢て難事に非ずとの自信を有せる獨逸は、常に之に耳を藉すことを爲さざりき。

武裝解除の國際平和論は必ずしも露國皇帝ニコラス二世の創意に出でたるものに非ずして、古代及中世に於ては屢々宗教家の口を通して、又近世に於ては佛主ヘンリー四世及グロチューズ、カント等の有名なる國際法學者及哲學者等に依りても提唱せられたる所なるも、前世紀の末に至る迄は未だ廣く世人の注意を喚起するに至らざりしが、軍備を維持せんが爲めに國民の負擔は歲と共に益々重きを加へ、之が爲めに諸般の施設を犠牲に供するも尙ほ負擔の過重に堪えざることを感じ、遂に武裝の解除は民力の休養に關する現實なる當面の問題として漸く世の注意を惹き、之が前提として一般的の平和運動は各地に各種の形式に依りて行はるゝに至りたりと雖も、(例へば瑞典人 Alfred Nobel 及米人 Andrew Carnegie の如きは平和運動促進の爲めに巨額の資金を提供し、波蘭人 Ivan S. Bloch 英人 Norman Angell 奧太利人 Alfred Fried 佛人 D'Estournelles de Constant 露國人 Count Leo Tolstoy の如きは、或は筆に或は口に平和運動の有力なる後援者となり、又社會主義者は何れの國に於ても軍國主義に極力反對して平和主義を鼓吹したるが如き是れなり)⁽¹⁾其の半面に於ては又獨逸の如くに益々軍備を充實することに依りて、

(1) J. S. Schapiro, Modern and Contemporary European History, p. 697.

國力の伸張を期せんとする者をも生ぜしめたるを以て、世界大戰前に於ける各國の形勢は頗る混沌たる状態に存したり。

此の如く武裝的平和に對する不安の念の各國民間に愈々大ならんとする時に當り、獨逸のみ獨り武裝の充實に汲々たりし所以は、帝國統一事業の完成後獨逸國民はビスマルクの偉業に鑑み、劍は舌よりも鋭く軍備は條約よりも重しとの思想に深く刺戟せられたる所あるに因るものにして、然かも獨逸國民が斯かる思想に何等の疑義を挟むことなくして、殆ど直覺的に之を認容しつゝありしは、ウエルス氏の指摘せるが如く全く極端なる獨逸至上主義を基調とせる誤れる教育制度の結果たらずんば非ざるなり。¹⁾

中世以後近世の初めに至る迄の歐洲諸國の政治組織は、所謂封建制度の下に半ば獨立の狀態に存したる地方的の政治團體の集合に過ぎざりしを以て、當時の人心を支配したる政治上の中心思想も亦全く地方主義に他ならざりしも、封建制度の瓦解と共に有力なる統一的國家の出現は、次第に地方的の精神を轉じて國家的精神の發動を促したりと雖も、當初の國家的思想は寧ろ國民の一部の階級即ち主として上流階級の間にのみ意識せられ、彼等以外の多數の國民は未だ明瞭に國家的の觀念を把持するに至らざりしが、佛蘭西の大革命は此の一部階級のみに依りて意識せられたる國家的の思想を、更に共同の利害關係を有せる國民全般に普及せしめ、茲に所謂國民的の思

1) H. G. Wells, The Outline of the History, p. 693 fg.

想を喚起せしむるに至りたりと雖も、政治上に於ける獨裁主義若くは寡頭主義の隋性は容易に之を改むること能はずして現世紀に及べり、然るに今世紀に入りてより以來國民的思想は更に進んで民意尊重主義の思想を生ぜしめ、從て政治上に於ても完全なる自治を以て其の理想となすに至れり、而して斯かる大勢に拮抗し來れるものは歐洲に於ては獨露の二大強國なりしも、露國は日露戰爭の結果國威を失墜し、列強間に於ける勢力又昔日の如くならざりしに反し、獨逸は帝國統一事業の完成後銳意國力の充實に努め、加ふるに其の政治上の實權は軍國主義を理想とせる一部階級の手中に存したるを以て、獨逸の隆盛は列強諸國に對して一大脅威たりしや疑ふ可からず。

嘗に政治上の主義に於て此の如く相反せるものありしのみならず、經濟上及產業上の競争に於ても列強就中英獨兩國の態度は、世界の平和を威脅すること頗る大なるものありき、蓋し英國は從來殆ど獨占的地位を有したる商工業的活動に於て勁敵獨逸の競争を恐れ、獨逸は又英國が關稅同盟を組織して獨逸品を海外市場より驅逐せんとするの意圖あるを顧慮し、或は通商保護を名として獨逸海軍の擴張せらるゝを見ては英國は恐怖の念に襲はれ、英佛兩國の協商を耳にしては獨逸は英國の心事を疑ひ、斯くして相互の不信は此の方面よりも益々増大するに至り、偶々一九一四年の埃塞戰爭を機會として、多年鬱積せる此の國際的の一大不安に對して總決算を爲すべ

き時期に到達せしめたり。

然るに前後五箇年間に亘る世界的の一大慘劇の恐るべき經驗の結果は、從來政治上及經濟上の諸般の問題に付きて動もすれば慎重の態度を缺ける各國民に對して、少くとも如何にせば世界の平和を維持する目的を達し得べきかと云ふことに關して再び深思熟慮の機會を與へ、此の目的を達成せんと欲せば過去に於けるが如き軍國主義を背景とせる武裝的の平和は、將來の世界の平和を保障する所以に非ざることを悟らしめ、又經濟上及產業上の活動に於ても、能ふ限り自我的衝動を抑制して人類共同の利益の爲めに協力することの必要を新に感ぜしむるに至れり、此の如くして前世紀の中葉以後世界の政治及經濟上の不安の一大原因を成せる、軍國主義、威壓主義、專制主義、自我主義等の思想は、世界戰爭の結果所謂全獨主義 (Pan-Germanism) の敗北と共に、實際上の關係に於ては大に緩和せらるゝに至りたりと雖も、之に反して國內に於ける異民族に對する關係に於ては尙ほ其の餘殃を存し、爲めに嫉視、反目、猜疑、憎惡の念の益々廣く異民族間に瀰漫せんとする傾向あるは、人類社會の幸福の爲めに一大恨事と稱せざるを得ず。

史を縊きて過去に於ける異民族の統一糾合に關する事跡を尋ぬる時は、其の原因固より單純ならずと雖も、大體に於て古代に在りては帝國主義的の領土擴張策の爲めに、又中世に在りては自國本位の經濟的利益範圍の獲得の爲めに、更に近世に至りては政治上及經濟上に於ける自衛自衛の目的の爲めに、優勢民族は劣勢民族を統一糾合して茲に複雑民族國を組織するに至れることを

發見するを得べし、而して古代及中世に於ては前者の後者に對する關係は、強者の權力に對する弱者の絶對的服従關係ありしのみにして、其の人格的價値の如きは殆ど之を認めず、甚しきに至りては之を遇すること全く奴隸と異ならざるが如きものさへありき、之れ蓋し當時の思想に依れば權力を有する者は又凡てを有するも、權力を有せざる者は何ものをも有せず (Power is all and powerless is non) の主義より、既に權力を失墜せるか或は又最初より之を有せずして優勢民族の爲めに統一糾合せられたる者は、其の有形的たるも無形的たるかを問はず、之に對して對等の人格的價値を認むるの要なしと思惟せるに因るものたり、而して權力の維持には武力の後援を必要とするも、武力の後援は軍備の充實を待て初めて其の目的を達し得べきが故に、權力主義即ち專制的威壓主義の行はるゝ所に於ては、其の必然の結果として武斷主義換言せば軍國主義の旺盛を見るに至るは毫も怪しむに足らず、斯かる場合には國內に於ける劣勢民族は、優勢民族の專制的威壓に對して内心反感を感じざるに非ずと雖も、實力上之と對抗すること能はざるより止むなく雌伏せる場合甚だ多し、然るに優勢民族は之を以て最終の勝利の如くに信じ、既に内に向て武力の用ゆべきもの無きを覺る時は、更に之を外に對する威力として活用せんと試み、遂に茲に國際紛争の端を開くに至ることあるは史上其の例に乏しからず、是れ國際間の關係に於ても專制的威壓主義若くは武斷的軍國主義を以て立てる國の常に危險視せらるゝ所以にして、既に指摘したるが如く世界大戰前に於ける獨逸の國情は正に之に比すべきものありしなり。

其の對内的關係に於けると對外的關係に於けるとを問はず、專制的威壓主義若くは武斷的軍國主義なるものは、人類の自由、平等、博愛を高調し、人は生れながらにして平等の權利を有す (All men are born and remain equal in rights) たることを宣言せる佛蘭西革命以前の舊思想に屬し、社會制度としては尙ほ奴隸の存在を是認し、政治の體系としては尙ほ封建制度を認め、經濟組織としては尙ほ地方的經濟の時代を脱せざりし當時の遺物たり、斯かる社會、政治及經濟狀態の下に於ては、專制的威壓主義若くは武斷的軍國主義は常に最終の支配權を有したるも、ヴォルテールの所謂進歩啓蒙は人の理性が何等の拘束を受くることなくして自由に活躍し、吾人の心を人生の凡ての問題に注ぎ得る時に於て初めて期待し得べしとの理想を現實化せんといふ、ある現今の時代に於ては、社會的、政治的及經濟的の何れの方面に於ても此の種思想を容るゝの餘地全くなきに至れり、人類の文化史上に一大汚點を印したる世界戰爭の慘劇なるものは、既に十八世紀に於て哲學者、科學者、詩人、歴史家等に依りて極力排斥せられたる此の頑冥にして有害無益なる中世的の思想の、尙ほ一部の人心を支配しつゝありしに因るものたり。

專制的威壓主義若くは武斷的軍國主義なるものゝ、現今の時代に於ては之を容るゝの餘地なきこと上述の如しとせば、之に代るべき思想及其の思想を基礎とせる諸般の制度の中心は之を何處に求むべきかと云ふに、人類の自由、平等、博愛の理想は、假令之が主唱者たる歐米諸國に於ては屢々誤用せらるゝの弊なきに非ずと雖も、人生至上の理想として其の中心を此處に求めんとす

(1) Schapiro, Ibid, p. 7.

る吾人の内心の欲求は、到底之を拒否すべからざるものあり、既に自由、平等、博愛を以て人類の共同生活上に於ける意志を統合する理想とせば、單一民族に依りて組織せられたる國に於ては固より、異民族の統一糾合に依りて成れる複雜民族國に於ても亦其の國民の共同生活の一切の規範は、之を自由、平等、博愛の理想に求めざる可からず、然るに現今の文明國中所謂複雜民族國として異民族を統一糾合せる各國の實況に就きて考察するに、同一民族間に在りては之を以て共同生活の最高理想となし、此の理想に到達せんが爲めには革命の慘劇をさへ敢て之を辭せざりし佛人の、其の植民地住民に對する態度を一瞥せば思ひ半ばに過ぐるものあり、否啻に文化の程度を著く異にせる母國對植民地間の關係に於てのみならず、戰前に於ける露國の波蘭人、芬蘭人、猶太人、獨逸の波蘭人、アルサス人、丁抹人等に對する態度及更に最近時に至る迄の英國の愛蘭人に對する態度等に就きて考ふるも、自由、平等、博愛の理想は支配階級に屬する民族に對しては普遍性を有するも、彼等以外の異民族に對しては其の普遍性を認めざるが如き狀態に在り、故に優勢民族に依りて統一糾合せられたる異民族の文化の程度にして著く劣れるか、若くは彼等の間に未だ民族的自覺心の萌芽を見ざる間は其の隸屬的地位に甘んずるも、一と度文化の光明に浴し民族的自覺心の衝動を感ずるに至る時は、終に極端なる革命運動となりて現はるゝか、或は又他國民の同情に訴へて解放を要求せんとするに至るは蓋し自然の勢と言はざる可からず。

現代文明の深刻なる評論家として又世界平和の熱烈なる宣傳者として、近時英國の論壇に一異

彩を放ちつゝあるウエルズ氏は、其の著『歴史要論』に於て、全世界の人類が互に共同の利益及幸福を増進せしめんが爲めに協力提携するに非ずして、偏狹なる自利心を基礎とせる國家主義又は國民主義に依りて行動する以上は、民族間に於ても國民相互の間に於ても衝突、鬭争、破壊、殺戮等は今後益々増加するに至るべしと喝破したるは、自國民のみを卓越せる國民の如くに思考して他國民及他民族は悉く之を劣等視し、偏狹なる自國至上主義の下に他國民及他民族を同化せしむることを以て、恰も彼等の幸福を増進せしむるものゝ如くに妄信せる、誤れる國民的自負心に充てる現今の所謂文明國民に對しては、洵に頂門の一針たらずんば非ざるなり。

眞に世界の平和と人類の福祉とを冀はんと欲せば、吾人は先づ斯かる誤れる國家主義若くは國民主義の羈絆を脱せざる可からず、而して徒に過去の傳統に捉はれたる虛榮的自負心、民族的優越感、種族的偏見、異民族に對する侮蔑心、排他的自我觀念等より吾人を離脱せしめざる可からず、此の如くにして初めて從來優勢民族のみの獨占に歸したる自由、平等、博愛の理想を普遍化せしむることを得べく、自由、平等、博愛の理想にして遺憾なく其の普遍性を發揮するを得ば、異民族との融合和親の如きは敢て困難なる問題に非ざるなり、世界大戰の人類社會に與へたる一大教訓は、戦前に於ける列強諸國が此の理想の徹底的實現に協力せずして、單に武装を解除せば國際間の平和を維持し得るものゝ如くに考へ、専ら此の方面にのみ力を用ゐたることの誤りなりしこと、既に指摘したるが如く偏狹なる國家的又は國民的優越主義を鼓吹して、徒に國民の虛榮

的自負心を増長せしめ、却て人類全體の幸福及利益の増進に着眼することを閑却したることの誤りなりしを覺らしめたることは是れなり。

戦前に於ける世界の歴史は偏狹なる利己的愛國心を基礎とせる國際競争の暗闘史に過ぎざりしも、將來の歴史は人類共同の幸福及利益の増進を目的とする國際協力の奮闘史たらしめざる可からず、既に國際關係に於て然りとせば國內に於ける異民族に對する關係の如きも、如何に之を改善すべきかは多言を須るずして明かなるべし、即ち過去に於ける植民地統治の歴史は、固陋なる民族的の優越感を基礎とせる同化主義若くは母國延長主義の實現に關する努力の歴史に過ぎざりしも、此の如き思想は畢竟專制的威壓主義若くは武斷的軍國主義の旺盛を極めたる時代の遺物にして、孰れも皆母國を本位として植民地の特性を無視せる偏狹なる國民性の反影に他ならず、將來の植民地統治の歴史は、自由、平等、博愛の理想を基準として、單なる母國對植民地としての關係よりは、更に大なる人類共同の幸福及利益の増進の爲めに、提携協力の實を擧げんとする努力の歴史たらしめざる可からず、而して人類共同の幸福及利益の増進の目的の爲めにする努力は、又聽て母國對植民地間の幸福及利益をも増進せしむるに至るものたることを忘るべからざるなり、戦後に於ける世界の強勢の推移と民族的自覺心の勃興とは、植民地の統治に付きて到底舊套を襲ふて一時の安きを偷むを許さざるものあり、我が國の如きも今に於て植民地統治の根本方針を確立するに非ずんば、他日臍を噛むとも遂に及ばざるの時あるべきや必せり。(完)